

## 鹿児島県南九州市知覧町池之河内荒岳でヤマホオズキを確認

立久井昭雄

〒 890-0036 鹿児島県鹿児島市田上台

### はじめに

2024 年 9 月 27 日、鹿児島県南九州市知覧町池之河内荒岳でヤマホオズキを確認したので報告する。

本種の国内分布は、本州（関東南部、東海、紀伊半島南部）・四国・九州（北村ほか, 1957; 山崎, 1981）である。九州の分布は各県、南は鹿児島県冠岳（南限）宮崎県（都城～御池）（初島, 2004）である。鹿児島県の分布は紫尾山、奥十曾、冠岳（初島, 1986）となっている。

ヤマホオズキ *Archiphysalis chamaesarachoides* (Makino) Kuang はナス科 (Solanaceae) の多年草である。鹿児島県レッドデータブック(鹿児島県, 2016) 及び環境省レッドリスト（環境省, 2025）で絶滅危惧Ⅱ類である。

### 確認地の状況

確認地は、知覧町池之河内荒岳の万之瀬川支流上流の源流部近くの標高 478 m の谷部である。この場所は、以前はモウソウチク林であったが、イノシシのタケノコ食害による掘り起しで、親竹まで枯死が進行している。そのため、谷部はやや明るい環境となっている。

### 確認株の特徴

横の広がりには 170 cm 程で、高さは 120 cm 程である。茎は紫褐色を呈し、上部は緑色をしている。

葉は薄く柔らかく、茎の下部に着く葉（図 3B）は大きく、長さ 10 cm、幅 5 cm 程である。上部の葉（図 3C）は小さくなり、長さ幅共に 3 cm 程

である。葉の縁には大きな鋸歯が数個出るものから全縁のものもある。葉の基部は葉柄に流れて翼をつくる。

花（図 3E）は葉腋に 1-2 個着き、花径（図 3G）は 1 cm 程で、花冠は白色で 5 深裂する。花冠の縁（図 3H）は細かく裂けた毛状様を呈している。花には 5 個のおしべと 1 個のめしべ（図 3I）があり、花冠の奥には黄緑色の斑点がある。がく（図 3F）は短い筒型で、表面に毛が密生し先は 5 浅裂する。

花後、白みがかったがく（図 3J）は成長すると次第に緑色となり、下垂（図 3K）し、液果を包み込む。がくの表面（図 3）には稜があり、その上に棘状の鋭い突起がある。果実が熟したときの様子を見るため、2024 年 12 月 20 日に同地を訪れた。果時のがく（図 3M）は白色で、中の液果の橙色が透けるため、淡い紅色に見える。大きさは幅 2.0 cm、長さ 1.8 cm 程で、果柄は 2.5-3 cm 程である。がくの中には、径 10 mm 程の液果（図 3N）があり、中には約 170 粒の白い種子（図 3O）が入っている。種子は丸く平たい形で、径 2 mm 程である。

### 新たな南限地

これまで、鹿児島県での本種の南限はいちき串木野市冠岳とされていた。2020 年 9 月 26 日、鹿児島植物研究会の観察会が曾於市財部木和田川流域で実施された。その折、日当たりの良い林道脇でヤマホオズキの小さな株数本が確認された。この地が新たな南限地となったが、本報告の知覧

Tachikui, A. 2025. A locality of *Archiphysalis chamaesarachoides* from Minamikyushu city, Kagoshima prefecture. *Nature of Kagoshima* 52: 97-99.

☑ AT: Tagamidai, Kagoshima-shi, Kagoshima 890-0036, Japan (e-mail: akiotachikui@outlook.jp).

Received: 9 October 2025; published online: 11 October 2025; [https://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK\\_052/052-024.pdf](https://journal.kagoshima-nature.org/archives/NK_052/052-024.pdf)



図 1. 財部町木和田の林道脇に生えるヤマホオズキ.



図 2. 知覧町池之河内荒岳の林下に生えるヤマホオズキ.

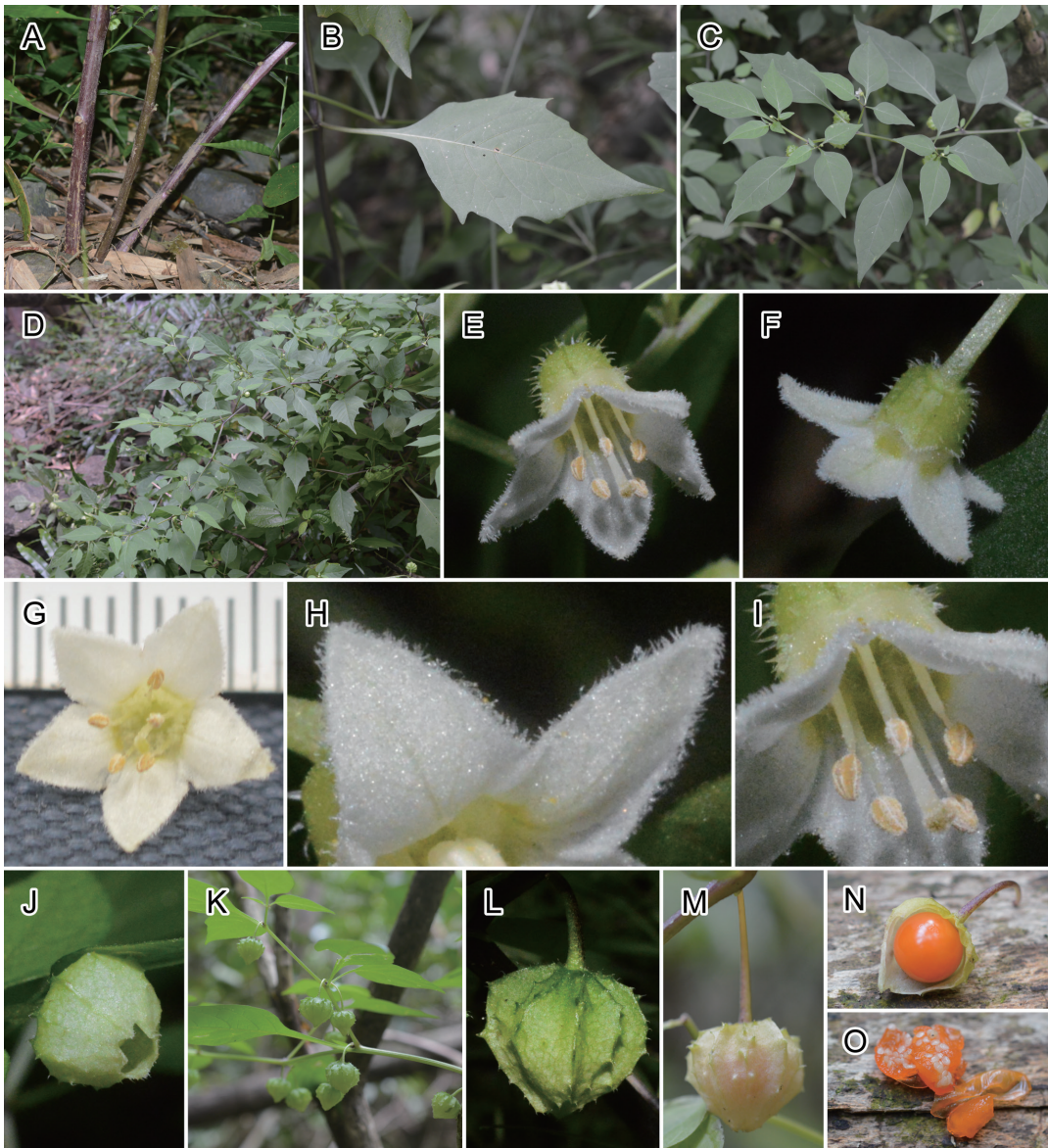


図 3. ヤマホオズキの特徴. A: 茎の下部. B: 下部の葉. C: 上部の葉. D: 茎の上部. E: 花. F: 花時のがく. G: 花の大きさ. H: 花冠. I: 花の内側. J: 若いがく. K: 下垂する果実. L: 果実. M: 熟期の果実. N: 液果. O: 種子.

町荒岳での確認が新たな南限地と考えられる。木和田川の確認地では、2022年8月23日に大きな2株(図1)を筆者が確認後、2023年2024年と確認に行ったが見つめることはできなかった。群落を作らず単独で生育していることが多く、環境の変化に弱いものと考えられる。

今回の確認地は、林道からかなり離れた谷部で、環境の変化も少ないと思われるので、継続した種の維持が期待できるが、わずか1個体なので今後も経過を見ていきたい。

### 証拠標本

今回作製した標本は、鹿児島大学総合研究博物館(KAG)、鹿児島県立博物館(KAP)に収めることとしている。

### 引用文献

- 初島住彦. 1986. 改訂 鹿児島県植物目録. 鹿児島植物同好会, 鹿児島. 290 pp.
- 初島住彦. 2004. 九州植物目録. 鹿児島大学総合研究博物館研究報告 No. 1. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 343 pp.
- 鹿児島県. 2016. 改訂・鹿児島県の絶滅のおそれのある野生植物—鹿児島県レッドデータブック2016—植物編. 鹿児島県環境技術協会, 鹿児島. 499 pp.
- 環境省. 2025. 第5次レッドリスト(植物・菌類). [https://www.env.go.jp/press/press\\_04578.html](https://www.env.go.jp/press/press_04578.html) (accessed 9 October 2025)
- 北村四郎・村田源・堀 勝. 1957. 原色日本植物図鑑・草本編 [I] 合弁花類. 保育者, 東京. 297 pp.
- 山崎 敬. 1981. ナス科. 佐竹義輔・大井次三郎・北村四郎・巨理俊次・富成忠夫(編). 日本の野生植物 草本III 合弁花類. 平凡社, 東京. pp. 92–96.